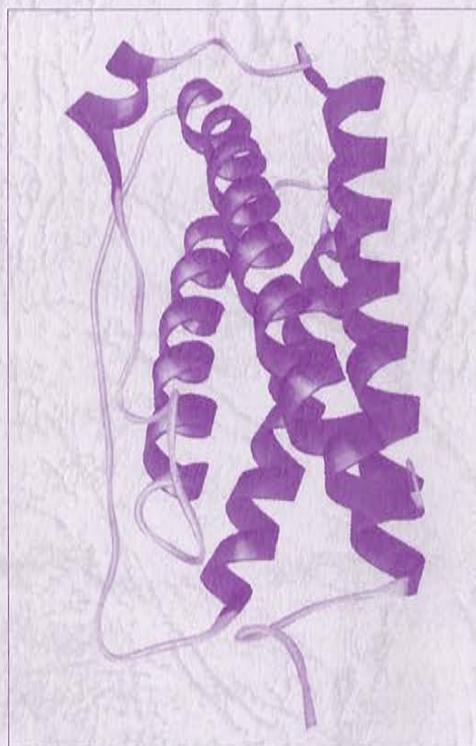


財団年報

平成19年度

Annual Report 2007



(財) 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

Kato Memorial Bioscience Foundation

財団年報

平成19年度

Annual Report 2007

(財) 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団
Kato Memorial Bioscience Foundation

目 次

はじめに	1
I. 平成19年度事業報告	
1. 年間の経緯	2
2. 助成事業	
(1) 第19回研究助成	3
(2) 第19回国際交流助成	6
(3) 第18回学会等開催助成	9
3. 研究助成贈呈式	11
4. 平成19年度決算報告	19
II. 平成20年度事業計画	
1. 助成事業	23
2. 創立20周年記念事業	24
3. 平成20年度事業予算	25
4. 平成20年度就任の財団役員等	26
III. 助成金受領者からの報告	
1. 第17回研究助成報告	27
2. 第19回国際交流助成報告	52
IV. 財団の運営と組織	
1. 設立趣意	88
2. 目的	89
3. 事業	89
4. 組織	89
5. 財団の概要	90
6. 平成19年度財団役員等	92
おわりに	95

はじめに

理事長 平田 正



我が国では平成8年から現在まで、科学技術基本計画に則りライフサイエンスを含む重点分野について、政府による科学技術強化策が実施されています。平成19年には、京都大学・山中教授によるヒト皮膚からiPS細胞が作られるという画期的な出来事がありましたが、これは継続的な基礎研究の成果と捉えることができます。一方、我々の身の回りを見た場合、地球温暖化対策、画期的医療の開発、食糧増産など、ライフサイエンスには大きな期待が寄せられています。これらの期待に応えるには、基礎研究の強化は言うまでもありませんが、社会全体では研究成果の実用化までのスピードアップ及び各種制度面での整備を併せて行うことが重要と考えられます。

さて平成19年度の当財団は、バイオサイエンス基盤研究に対する助成事業を予定通り行うことができました。研究助成は28名の方に合計5,000万円、国際交流助成は35名の方に合計740万円、学会等の開催助成は6件合計120万円を助成することができ、助成総額は5,860万円となりました。

また平成19年度は、翌年が財団創立20周年に当たることから、20周年記念行事を企画する年でもありました。財団関係者からご意見を伺うとともに、理事・評議員の先生からなる企画委員会を設けて検討いたしました。その結果、平成20年度には通常の助成事業に加え、「記念講演会の開催」、「特別枠研究助成の贈呈」、「記念誌の発行」の3つの記念事業を実施することにいたしました。

平成20年度の財団活動は既に始まっていますが、20周年記念事業の実施、新公益法人制度移行に向けての基本プランの作成といった大きな活動が控えています。また、平成20年10月には出捐会社である協和発酵工業(株)が協和発酵キリン(株)として新たにスタートすることが予定されているなど、当財団としても節目の年になります。これまでの20年間の活動を振り返るとともに社会環境の変化もふまえ、財団の役割・活動理念を再確認のうえ、我が国バイオサイエンスの振興に向けた助成活動をしっかりと継続していきたいと考えております。

この一年間の財団活動にご尽力いただきました選考委員・評議員・役員の先生方、及び関係者の皆様に改めて感謝いたします。今後とも皆様のご指導とご支援をお願い申し上げます。

I. 平成19年度事業報告

1. 年間の経緯(平成19年4月～平成20年3月)

平成19年

- 5月 8日 第18回学会開催助成(6件)
- 5月15日 会計監査
- 5月25日 財団パンフレット更新
- 5月31日 第19回国際交流助成(前期)募集締め切り
- 6月 1日 第38回理事会・評議員会 於：経団連会館
 - ①平成18年度事業及び収支決算報告、②会計処理規定、③財団創立20周年記念事業方針
- 6月25日 文部科学省へ平成18年度事業状況報告書及び登記事項変更届提出
- 6月28日 第19回国際交流助成(前期)候補者選考会 於：学士会分館
- 7月12日 第42回生命科学助成財団懇談会(幹事担当)
於：ラフォーレ修善寺研修センター
- 8月 1日 財団年報第8号(平成18年度)刊行
- 8月31日 第19回研究助成及び第19回国際交流助成(後期)募集締め切り
- 9月20日 第19回国際交流助成(後期)候補者選考会 於：学士会分館
- 10月22日 創立20周年記念事業 第1回企画委員会 於：学士会分館
- 11月28日 特定公益増進法人許可更新
- 12月 6日 第19回研究助成候補者選考委員会 於：経団連会館
- 12月18日 創立20周年記念事業 第2回企画委員会 於：経団連会館

平成20年

- 2月 1日 第39回理事会・評議員会 於：経団連会館
 - ①第19回研究助成対象、②創立20周年記念事業内容、③次期選考委員、④平成20年度事業計画および予算
- 2月29日 書面による臨時評議員会
 - ①理事の辞任、②新理事の選任
- 3月14日 書面による臨時理事会
 - ①常務理事の選任、②評議員の辞任
- 3月 7日 第19回研究助成贈呈式 於：如水会館
- 3月27日 文部科学省へ平成20年度事業計画書及び収支予算書提出

2. 助成事業

第37回理事会・評議員会(平成19年2月2日)にて決定された平成19年度事業計画に則り、助成事業として研究助成、国際交流(海外派遣)助成及び学会等の開催助成を実施した。各助成における応募状況と採択率等を下表に示した。

事業名	推薦または申請件数	助成件数	採択率(%)	予算総額(万円)	実績(万円)
研究助成	182	28	15.4	5,000	5,000
「研究助成」メデイカルサイエンス分野	70	11	15.7		2,200
「研究助成」バイオテクノロジー分野	78	11	14.1		2,200
「奨励研究助成」	34	6	17.6		600
国際交流助成	74	35	47.3	750	740
(前期)	36	19	52.8		425
(後期)	38	16	42.1		315
学会等の開催助成	6	6	100	120	120

(1) 第19回(2007年度)研究助成

2006年度の募集要項改訂により、①「研究助成」メデイカルサイエンス分野、②「研究助成」バイオテクノロジー分野、③「奨励研究助成」(指定領域;A“生物機能を利用した物質生産技術に関わる研究”、B“機能性食品及びその素材に関わる研究”、C“環境・エネルギーに関わる研究”)に区分して、平成19年6月～8月末の期間において募集した結果、全国の研究機関(Aグループは②、③に応募可能。Bグループは①、②及び③に応募可能)の長および当財団の理事・評議員から、①「研究助成」メデイカルサイエンス分野は70件、②「研究助成」バイオテクノロジー分野は78件、③「奨励研究助成」は34件の合計182件(昨年度171件)の応募があった。

申請書は選考委員により審査され、平成19年12月6日(木)の選考委員会において、研究助成の候補者として、①「研究助成」メデイカルサイエンス分野11名(補欠2名)、②「研究助成」バイオテクノロジー分野11名(補欠2名)、③「奨励研究助成」6名(補欠2名)の候補者28名が選出された。平成20年2月1日(金)に開催された第39回理事会・評議員会で、助成対象者合計28名が決定された。

平成20年3月7日(金)に如水会館で贈呈式を行い、「研究助成」1件当たり200万円及び「奨励研究助成」1件あたり100万円の助成金目録及び記念の盾を贈呈した。

助成対象者氏名・所属機関・職名・研究題目を表1に示す。

表 1. 第19回加藤記念研究助成対象者

①「研究助成」メディカルサイエンス分野

番号	氏名	所属機関名	職名	研究題目
1	内村 健治	国立長寿医療センター研究所	室長	老人斑ケラタン硫酸の生合成およびアルツハイマー病発症に関する基礎研究
2	生沼 泉	京都大学大学院生命科学研究所生体システム学分野	助教	ガイダンス分子の情報伝達におけるR-Rasの普遍的で新しい分子機構の解明
3	大内田研宙	九州大学大学院医学研究院先端医療医学講座	特任助教	膵癌におけるmicroRNA発現とその機能；早期診断、個別化治療への応用
4	片山 義雄	神戸大学医学部附属病院血液内科	特定助教	荷重による造血調節機構の解明
5	佐藤浩二郎	埼玉医科大学医学部内科学リウマチ膠原病科	講師	システムバイオロジー的アプローチによるT細胞・破骨細胞活性化機構の比較解析
6	田中 信忠	昭和大学薬学部薬品物理化学教室	講師	ホスミドマイシン標的酵素の立体構造に基づく新規抗マラリア薬の創製
7	日野真一郎	宮崎大学医学部解剖学講座分子細胞生物学分野	助教	小胞体ストレス制御による神経変性疾患の治療戦略開発
8	牧野 雄一	旭川医科大学内科学講座病態代謝内科学分野	講師	低酸素応答性転写制御装置の発現調節機構の解明と疾患治療への応用
9	山内 淳司	国立成育医療センター研究所薬剤治療研究部分子薬理研究室	室長	感覚神経ニューロパチーに関与するシグナル伝達経路の解明とその治療標的分子の同定
10	吉田 清嗣	東京医科歯科大学難治疾患研究所分子遺伝分野	准教授	レドックス制御における細胞質一核クロストーク機構とアポトーシス誘導
11	和多 和宏	北海道大学大学院先端生命科学研究院	准教授	言語野機能部位同定を目指した遺伝子プローブの探索：ソングバードを用いた先導的研究

②「研究助成」バイテクノロジー分野

番号	氏名	所属機関名	職名	研究題目
1	井上 将行	東京大学大学院薬学系研究科有機反応化学教室	教授	天然神経毒の構造利用による生体組織の光制御
2	大平 剛	神奈川大学理学部生物科学科分子生物学研究室第二	特別助手	クルマエビの成熟促進ホルモンの精製と構造解析
3	小野 昌弘	京都大学再生医科学研究所生体機能調節学	助教	制御性T細胞の免疫反応抑制機能に着目した、免疫抑制活性をもつmiRNAの探索

4	川崎 善博	東京大学分子細胞生物学研究所分子情報研究分野	助 教	細胞内シグナル伝達経路における癌抑制遺伝子産物 APC の機能解析
5	栗栖 源嗣	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻	准教授	植物が持つ機能的還元力分配システムとその分子装置の構造研究
6	櫻井 香里	東京農工大学大学院共生科学技術研究院生命機能科学部門	特任准教授	癌抑制転写因子 p53 由来 α -ヘリックスペプチドを基盤とする癌蛋白質阻害剤の創製
7	佐藤 隆史	群馬大学生体調節研究所生体情報部門	助 教	培養細胞を用いた細胞極性に関与する新規遺伝子の同定
8	塩見美喜子	徳島大学ゲノム機能研究センター分子機能解析分野	准教授	マウス Argonaute 蛋白質に対する特異抗体を用いた RNAi 経路の解析
9	高岡 晃教	北海道大学遺伝子病制御研究所分子生体防御分野	教 授	分子パターン認識機構に着目したバイオセンサーの開発と応用を目指した基礎研究
10	徳山 英利	東北大学大学院薬学研究科医薬製造化学分野	教 授	多環性高次構造を有するアルカロイド類の合成研究
11	沼田 倫征	産業技術総合研究所生物機能工学研究部門機能性核酸研究グループ	研究員	忠実なタンパク質合成に不可欠な tRNA 修飾塩基の生合成機構の分子的基盤

③ 「奨励研究助成」

番号	氏 名	所属機関名	職 名	研究題目	指定領域
1	秋田 英万	北海道大学大学院薬学研究院薬剤分子設計学研究室	助 教	細胞内動態と血中分散性制御に基づく in vivo 用遺伝子キャリアの構築	B
2	小川 拓哉	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科細胞増殖学講座	助 教	非必須アミノ酸 L-セリンの新規アナログによる骨粗鬆症改善法の開発	B
3	土反 伸和	京大大学生存圏研究所森林圏遺伝子統御分野	特任助教	プレニル化芳香族輸送蓄積機構の解明と大量生産への基盤構築	A
4	大道寺 智	大阪大学微生物病研究所感染症国際研究センター高病原性感染症研究部門ウイルス研究グループ	特任研究員	組み換えニューカッスル病ウイルスを用いた呼吸器感染症に対する新たな予防法の開発	A
5	堀之内正枝	独) 理化学研究所環境分子生物学研究室	研究員	ステロイド分解菌のコール酸分解中間体と分解遺伝子の解析	A
6	牧野 利明	名古屋市立大学大学院薬学研究科医療機能薬学専攻生薬学分野	准教授	流入型トランスポーターを介する機能性食品と医薬品間の相互作用	B

(2) 第19回(2007年度)国際交流助成

平成19年度の国際交流助成は例年通り雑誌等のメディアおよび当財団ホームページを通し公募した。応募者は前期(平成19年5月31日締切)応募者36名、後期(平成19年8月31日締切)応募者38名であった。選考会にて助成候補者が選考され、前期19名、後期16名の合計35名に対し評議員会議長および理事長の承認後合計740万円(前期425万円、後期315万円)が助成された。学会発表に関する報告書はⅢ-2に掲載する。

助成対象者氏名・所属・職名・発表学会等を表2・表3に示す。

表2. 第19回加藤記念国際交流助成(前期)対象者

番号	氏名	所属機関	職名	学会名	国、州	助成金(万円)
1	磯兼真由美	愛媛大学 大学院医学系研究科 病態制御部門	大学院生	EMBOカンファレンス Nuclear Structure and Dynamics	フランス	20
2	板垣 史郎	北海道大学 大学院薬学研究院 臨床薬剤学研究室	助教	第3回世界薬学会議	オランダ	30
3	伊藤 貴浩	東京大学 大学院薬学系研究科 機能薬学専攻	助教	第5回国際幹細胞生物学会年会	オーストラリア	20
4	上原亜希子	東北大学 大学院歯学研究科 口腔微生物学分野	助手	第1回国際自然免疫学会	トルコ	20
5	大西 紀和	京都大学 大学院生命科学系研究科 遺伝子特性学分野	研究員	第6回無機炭素利用国際会議	スペイン	30
6	加藤 正晴	東京女子医科大学 医学部乳児行動発達学講座	特認助教	第3回錯視コンテスト(視覚学会)	フロリダ州	25
7	加藤 幸成	産業技術総合研究所 糖鎖医工学研究センター	研究員	第98回米国癌学会総会	ロサンゼルス州	20
8	河田 英里	京都大学医学部附属病院 輸血細胞治療部	大学院生	第14回ヨーロッパ癌学会	スペイン	30
9	合山 進	東京大学医学部附属病院 血液・腫瘍内科	医員	国際幹細胞研究学会	オーストラリア	20
10	杉本 真樹	帝京大学 ちば総合医療センター外科	助手	第15回欧州内視鏡外科学会国際会議	ギリシャ	30
11	田中 将史	神戸薬科大学 薬品物理化学研究室	助教	第48回国際脂質生化学会会議	フィンランド	30

番号	氏名	所属機関	職名	学会名	国、州	助成金 (万円)
12	千枝 結香	九州大学 大学院農 学研究院 応用昆虫 学	研究員	昆虫バイオテクノロ ジー及び産業に關す る国際学会	大韓民国	10
13	西原 広史	北海道大学 大学院 医学研究科 分子細 胞病理	助教	セカンドメッセン ジャー及びリン酸化 蛋白に關する国際カ ンファレンス	カリフォル ニア州	20
14	福田 康弘	金沢大学 大学院自 然科学研究科 生命 科学専攻	大学院生	第5回ヨーロッパ 原虫学会および、第 11回ヨーロッパ繊 毛虫学会合同大会	ロシア共和 国	20
15	船渡川 伊久子	帝京大学医学部 衛 生学 公衆衛生学	助教	第28回国際臨床生 物統計学会年次大会	ギリシャ	20
16	古谷 祐詞	名古屋工業大学 大 学院工学研究科 物 質工学専攻	助教	第9回バイオテク ノロジー・金属錯体・ 触媒に關する国際会 議	中国	15
17	松本 幸子	国立循環器病セン ター研究所 病因部	特任 研究員	第21回国際血栓止 血会議	スイス	20
18	丸山真一朗	東京大学 大学院理 学系研究科 生物科 学専攻	学術研究 支援員	2007年国際原生 生物学会/米国藻類学 会合同学会	ロードアイ ランド州	25
19	吉種 光	東京大学 大学院理 学系研究科 生物科 学専攻	大学院生	第72回 コールド・ スプリング・ハー バー・シンポジウム	ニューヨー ク州	20

表 3. 第19回加藤記念国際交流助成(後期)対象者

番号	氏名	所属機関	職名	学会名	国、州	助成金 (万円)
1	相澤 健一	東京大学 大学院医 学系研究科 ユビ キタス予防医学講 座	助教	第80回アメリカ心 臓協会学術集会	フロリダ州	10
2	加野 真一	東京大学 大学院医 学系研究科 病因病 理学専攻	学術研究 支援員	第15回国際サイト カイン学会年次集会	カリフォル ニア州	20
3	上辻 由里	京都府立医科大学 大学院医学研究科 免疫内科学	大学院生	第49回米国血液学 会	ジョージア 州	25
4	上中 弘典	鳥取大学農学部 植 物分子生物学分野	助教	キーストンシンポジ ウム「植物ホルモン とシグナル伝達」	コロラド州	20

番号	氏名	所属機関	職名	学会名	国、州	助成金 (万円)
5	河原井武人	国立感染症研究所 細菌第一部第六室	研究員	アメリカ微生物学会 第3回細菌細胞間 コミュニケーション 国際会議	テキサス州	25
6	斎藤 将樹	東北大学 国際高等 研究教育機構・国際 高等融合領域研究 所	助教	アメリカ細胞生物学 会	ワシントン DC	25
7	立原 淳貴	東京大学 大学院工 学系研究科 バイオ エンジニアリング 専攻	大学院生	第11回化学・生命 科学用超小型機器に 関する国際会議	フランス	15
8	谷本 安浩	日本大学松戸歯学 部 歯科生体材料学 講座	講師	第2回生体材料・ 組織のメカニクスに 関する国際会議	ハワイ	15
9	田村 拓也	東京医科歯科大学 難治疾患研究所神 経病理学	助教	コールド・スプリ ング・ハーバー研究 所 ショウジョウバエ 神経生物学ミーティ ング	ニューヨー ク州	25
10	豊留 孝仁	千葉大学真菌医学 研究センター 真菌 感染分野	講師	第3回国際アスペ ルギルス症学会	フロリダ州	15
11	寅嶋 崇	金沢大学 大学院医 学系研究科 シナプ ス発達機能学	助教	第37回米国神経科 学会	カリフォル ニア州	20
12	丹羽 美苗	名城大学 大学院薬 学研究科 臨床薬学 専攻	ポスドク	第37回米国神経科 学会	カリフォル ニア州	10
13	貫井 陽子	国立感染症研究所 ウイルス第一部第 二室	流動 研究員	米国熱帯医学学会総 会	フィラデル フィア州	25
14	平川 秀忠	大阪大学 産業科学 研究所 生体情報制 御学研究分野	大学院生	アメリカ微生物学会 第3回細菌細胞間 コミュニケーション 国際会議	テキサス州	25
15	堀 知行	東京大学 大学院 農学生命科学研究科 応用生命工学専攻	大学院生	国際ワークショップ 「極度のエネルギー 制限条件下における 微生物の生命維持」	デンマーク	25
16	牧野 悟士	徳島大学 大学院ヘル スバイオサイエ ンス研究部 感覚情 報医学講座	COE 研究員	アメリカ人類遺伝学 会 第57回総会	カリフォル ニア州	15

(3) 第18回(2007年度)学会等の開催助成

平成19年度開催分で理事・評議員から推薦のあった下記6件の学会等に対して、選考委員長・評議員会議長及び理事長の承認を得て、助成金額を1件20万円とし合計120万円の助成を実施した。学会名等は下記の通りである。

1. 日本分子生物学会 第7回春季シンポジウム

- ① 2007年4月23日～4月24日 [参加者 海外7名、国内180名]
- ② 兵庫県立淡路夢舞台国際会議場
- ③ 申請者 塩見 春彦
- ④ 推薦者 小田鈎一郎 理事

2. 2007年度 日本放線菌学会大会

- ① 2007年5月31日～6月1日 [参加者 海外6名、国内200名]
- ② 尾道市しまなみ交流館
- ③ 申請者 木梨 陽康
- ④ 推薦者 大村 智 理事

3. 第14回有機合成指向有機金属化学国際会議

- ① 2007年8月2日～8月6日 [参加者 海外330名、国内550名]
- ② 奈良市なら100年会館
- ③ 申請者 大寫幸一郎
- ④ 推薦者 北原 武 評議員

4. 先端医科学国際シンポジウム2007

- ① 2007年9月29日 [参加者 海外3名、国内100名]
- ② 自治医科大学研修センター
- ③ 申請者 小澤 敬也
- ④ 推薦者 高久 史麿 理事

5. 第5回国際核酸化学シンポジウム

- ① 2007年11月20日～11月21日 [参加者 海外50名、国内350名]
- ② 東京大学安田講堂
- ③ 申請者 小宮山 真
- ④ 推薦者 大塚 栄子 理事

6. The 39th Conference of the Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health(2007)

- ① 2007年11月21日～11月25日 [参加者 海外 150名、国内 350名]
- ② 女子栄養大学坂戸キャンパス
- ③ 申請者 宮城 重二
- ④ 推薦者 香川 靖雄 理事

3. 研究助成贈呈式

第19回加藤記念研究助成贈呈式は、平成20年3月7日(金)14時から如水会館(千代田区一ツ橋)において受領者(28名出席)、財団関係者・来賓他ほぼ80名の参加のもとに開催された。

理事長挨拶、山根選考副委員長の選考経過報告に続いて、理事長から受領者一人一人に助成金目録および記念盾が授与された。引き続き文部科学省研究振興局ライフサイエンス課課長菱山豊氏から祝辞が述べられ、その後受領者全員から助成対象となった研究計画の発表に移った。一人4分の持ち時間であったが、それぞれ研究の背景、計画、期待される成果など良く準備された説明であった。

主な出席者(敬称略)：菱山 豊(文部科学省・ライフサイエンス課課長)、松田 譲(協和発酵・社長)
財団関係者(敬称略)：木下祝郎(名誉会長)、大澤利昭(名誉理事)、平田 正(理事長)、土井内徹(常務理事)、大塚栄子(理事)、小田鈎一郎(理事)、香川靖雄(理事)、木村 光(理事)、森 謙治(理事)、北原 武(評議員)、鶴尾 隆(評議員)、長澤寛道(評議員)、三品昌美(評議員)、山根久和(選考副委員長)、久保田紀久枝(選考委員)、畠山昌則(選考委員)、福山 透(選考委員)、水澤英洋(選考委員)、依田幸司(選考委員)、奈良 高(財団OB、以下同様)、鈴木武夫、古屋 晃、岡 徹夫、今田 克、小室敏雄、木幡 守、萩野浩志

(1) 理事長挨拶

理事長 平田 正

本日は皆様方には大変お忙しい中、第19回加藤記念研究助成贈呈式に多数ご出席賜り誠に有り難うございます。また、本日は当財団の主務官庁でございます文部科学省研究振興局ライフサイエンス課課長の菱山 豊様にもご臨席頂いくことになっております。間もなくお出でいただく予定でございます。贈呈式を始めるにあたりまして理事長として一言ご挨拶申し上げます。

加藤記念バイオサイエンス研究振興財団は、協和発酵工業株式会社の創立者でありました加藤辨三郎博士の「バイオサイエンスを通じて社会の発展に寄与したい」という強い念願を実現すべく、協和発酵の創立40周年を記念致しまして1988年-昭和63年12月に設立された財団でございます。爾来当財団は、「サイエンスの発展には創造的な若い頭脳に期待することが大切である」との認識から「独創的な若手研究者への研究助成」をわが国のバイオサイエンスの発展に最も重要な事業として位置付けて参りました。若手研究者への研究助成および国際交流助成等がそれでございます。

皆様ご承知の通り、資源の乏しいわが国は、正に「科学技術創造立国」を目指し、平成18年度から始まりました第3期科学技術基本計画においても5年間で25兆円という巨額の投資目標額も設定され、競争的資金を中心に研究費も拡充されてきている所でございます。

しかし、科学技術の発展を支える根幹は正に“人”であり、皆さん方に代表される若い研究者の頭脳にあると考えています。ノーベル賞に繋がるような独創的・先駆的な研究・発見は必ずしも大型研究費を伴うものではなく、既存の概念に捉われず、むしろ個性的で創造性豊かな若い研究者の独創的な発想と粘り強い研鑽から生み出されることの方が多いと言われております。

当財団の研究助成は決して多額なものではありませんが、このような認識に立ち、バイオサイエンスの研究分野におきまして、この助成活動を継続することにより、いささかでも若い研究者の皆様の独創的・先駆的な研究を支援したいと考えている次第でございます。

昨今の経済情勢には大変厳しいものがありますが、幸い当財団は協和発酵工業株式会社から毎年多大なご支援を戴き、それによって本年度も継続的に研究助成事業を行うことが出来ました。皆様方のご尽力により当財団の評価も着実に高まってまいりまして、若手研究者の助成事業には年々多数の応募を頂いております。今年度は、財団の最も大きな事業である「研究助成」では、合計182名の応募をいただき、その中から選ばれました28名の方々に記念の盾と総額5,000万円の助成金を贈呈いたします。また、「国際交流助成」では74名の応募に対し35名の方に総額740万円、「学会等の開催助成」は6件、120万円を助成いたしております。

本日助成を受けられます皆様方の研究が、皆様の創意と情熱により、「種」から「新芽」そして10年後、20年後には「果実」を結び、わが国のバイオサイエンスの進歩、ひいては地球的規模の諸問題の解決や日本の新しい産業の礎にまで発展されますよう切に祈念致しております。

ご臨席の皆様から助成を受けられる若き研究者に今後の発展を祈念して励ましのお言葉をお掛け頂ければ幸いに存じます。

終わりに、本研究助成の選考に当たられました選考委員長の山本一彦先生、副委員長の山根久和先生はじめ19名の選考委員の先生方に深く感謝申し上げます。

また、平成20年度は財団創立20周年の記念の年となります。本日ご臨席の皆様には、加藤記念バイオサイエンス研究振興財団に対しまして今後ともより一層のご支援・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(2) 選考経過報告

選考副委員長 山根 久和

第19回加藤記念研究助成を受けられる28名の皆様、本当におめでとうでございます。選考副委員長を務めさせていただいております、東京大学・生物生産工学研究センターの山根と申します。選考委員長の東京大学大学院医学系研究科の山本一彦先生が海外出張中のため、私から平成19年度の選考経過及び結果について報告させていただきます。

本研究助成では、平成17年度までは、バイオサイエンス全体を一つの分野(採択数22件)として募集していましたが、平成18年度に応募区分の改訂があり、研究助成がメディカルサイエンスとバイオテクノロジーの2つの分野に分けられ、さらにバイオテクノロジー関連の奨励研究(6件)が設けられました。また、女性支援策として、応募年齢を男性より五歳上にする改訂も行われました。その結果、平成18年度は、全体の応募件数で平成17年度より69件増えて171件、女性の応募件数も平成17年度より28件増えて43件となり、ともに大幅に増加致しました。

平成19年度も引き続き多数の応募があり、応募件数は、メディカルサイエンス分野70件、バイオテクノロジー分野78件、奨励研究34件となり、全体では平成18年度より11件増えて182件となりました。また、女性の応募件数も全体で37件となっています。これらの申請に対して、各分野の専門の

選考委員の先生方にまず書面審査をしていただき、次に、選考委員が一堂に会して十分な審議を行いました。その結果、研究助成として、メディカルサイエンス分野11件、バイオテクノロジー分野11件、奨励研究6件を採択致しました。

今回応募いただきました研究課題には優れたものが数多く含まれていましたが、その中でも本日受賞されます皆様の研究課題は、いずれも独創性、先端性において特に高い評価が得られたものでございます。皆様には研究助成金を活用して是非研究目的を達成していただき、優れた研究成果を世界に発信していただきたいと思っております。

若手研究者の研究をサポートし、我が国のバイオサイエンス研究の発展に多大な貢献をされている加藤記念バイオサイエンス研究振興財団にあらためて敬意を表しますとともに、受賞者の皆様のご研究の更なる発展を祈念しまして、選考経過と結果の報告とさせていただきます。

(3) 祝 辞

文部科学省研究振興局ライフサイエンス課課長 菱山 豊

ただ今ご紹介頂きました文部科学省ライフサイエンス課長の菱山でございます。

先ず始めに、本日、加藤記念バイオサイエンス研究振興財団から研究助成金の贈呈を受けられた28名の研究者の皆様方に対しまして、心よりお慶び申し上げます。

皆様が日夜研究に励んでおられるライフサイエンス分野は、非常に大きな期待と激しい競争の中にあると思います。我が国のライフサイエンス研究は目覚ましい成果が出ており、昨年は京都大学の山中伸弥教授が人のiPS細胞(人工多能性幹細胞)を作ることに成功され、そのニュースが大きく取り上げられました。iPS細胞については山中教授が大きな成果を上げられたわけですが、その基にはゲノムのデータベースや細胞の培養方法が使われており、日本の基礎研究の成果が使われたわけであります。日本で行われた幅広い基礎研究により、基盤が整っていたことが大きく貢献したのであらうと思えます。従って一つの研究が大きく花開くには、特定課題を見ているだけでは十分でなく、ライフサイエンスという分野全体を推進していくことが重要なのではないかと考えております。

本日受賞された皆様の研究機関や研究内容は色々な分野にまたがっており、最先端のライフサイエンス研究の縮図を見せていただいたと思っております。皆様は、正に日本のライフサイエンスの現在そして将来を背負っておられる方々であると強く感じた次第です。文部科学省としてもライフサイエンスの振興は重要であると認識しています。本日の受賞を契機とされまして、今後一層精進されご活躍されることを大いに期待しております。

加藤記念バイオサイエンス研究振興財団におかれましては、バイオサイエンスの振興に終生ご尽力されました加藤辨三郎翁の想いを継承し、民間財団として長年バイオサイエンス分野における若手研究者の発掘および育成に貢献されていることに対し、また財団の平田理事長はじめ財団役員、選考委員の先生方、事務局の方々に深く敬意を表する次第です。

最後になりましたが、皆様方のご研究と財団の一層のご発展を祈念申し上げましてお祝いの言葉とさせていただきます。

(4) 祝賀パーティー

贈呈式が滞りなく終了し、助成対象者と財団関係者の記念撮影後、17時から祝賀パーティーの開催となった(如水会館・ペガサスの間)。

最初に当財団の出捐者である協和発酵工業(株)代表取締役社長松田譲氏よりご挨拶を頂戴した。

挨拶

協和発酵工業(株)代表取締役社長 松田 譲

本日受賞された皆様方、おめでとうございます。また選考に当たられました先生方、本当にご苦勞様でございました。この財団の研究助成は外部から高い評価を頂いております。厳正で公正な審査、そして先生の目利きといえますか、素晴らしい提案を評価する眼力があればこそ、高い評価が得られているのではないかと思います。昨年度もふれましたが、第一回目の受賞者には、今世界で最も論文引用数が多い審良静男先生、また中村祐輔先生が名前を連ねておられます。皆様もぜひこの先輩方に負けないよう、大いに研究に励んでそして将来ノーベル賞に繋がるようなりっぱな研究成果を上げて頂くようお願いし、また期待しております。

さて、最近の世の中の変化には誠に厳しいものがあり、企業活動をやっておりましても本当に大変な面がございます。今から2、3年前になりますでしょうか、第一生命の経済研究所からの報告で、もし今にも手を打たなければ2050年には労働人口は4割減って、産業力は衰え国力も衰えて、もはや食糧もエネルギーも買うお金がなくなってしまう、こういう日本の姿を描き出して警鐘を鳴らしておりました。しかし、昨今はエネルギーの奪い合いによる価格の高騰があったり、日本のGDPは世界の18位の位置に甘んじているような状況でございます。2050年と言わないまでも、10年後か20年後には、日本はエネルギーも食糧も買うお金がなくなってしまう、こういう状態になるリスクがあるわけです。こういう厳しい状況を直視しないで目をそらせば、企業はたちまち衰退して縮小均衡に陥ってしまいます。

日本のバイオテクノロジーは、我が国が世界に誇る発酵技術をベースに発展してきたわけでございます。協和発酵は、このバイオテクノロジーを基盤にした日本発の開発型ライフサイエンス企業を目指そうということで、日の丸連合としてキリンファーマさんと本年10月1日に一緒になることを決断したわけでございます。今日お集まりの皆さんは協和発酵の熱烈なファンであると私は信じておりますが、協和発酵キリンになりましたら、ぜひ引き続き暖かいご支援を賜りますようお願い致します。日の丸連合で大いに海外でドルやユーロを稼いで、日本に持ち帰り加藤記念財団の寄付を増やしたいと思っておりますので、ぜひご支援賜りますようお願い申し上げます。本日は誠にありがとうございました。

引き続き、当財団の鶴尾 隆評議員より乾杯のご挨拶を頂戴しました。

乾杯の挨拶

財団評議員 鶴尾 隆 先生

まず、22名の研究助成受賞者と6名の奨励研究助成受賞者の皆様に心からお祝いを申し上げます。

今後の研究計画を聞かせて頂きましたが、非常に幅広く楽しい内容ですので、頑張ってくださいと思います。

この賞は、名前の通り協和発酵の創設者で社長であられた加藤辨三郎先生の名前を頂いた助成でございます。私も助成金を頂き、また審査に関わることもございましたが、この財団の研究助成というのはいくつの特徴があると思っています。一つは非常に長い歴史があるということで、今回20回ということですので、1980年代後半に始まったと思います。ちょうど1980年代というのはいわゆるバイオサイエンスの勃興期でございまして、遺伝子のクローニングあるいはモノクローナル抗体、こういった技術が非常に発達した時代でございました。こういう背景の中でスタートした助成でございますので、おそらく1990年代の日本のバイオサイエンス研究を側面から大きく支えた一つの助成ではなかったかと思います。それから二つ目の特徴ですが、この助成の誇るべきところは、非常に幅広いものであるということでありまして、学部でいいますと医学部、農学部、薬学部、理学部、工学部も含んだいわゆる理系の全ての研究を対象にしたような助成ということでございます。またもう一つの特徴として、非常に受賞者が多いということでございます。今回も30名近い受賞者がおられますが、これほど多くの受賞者ができる研究助成というのは日本においてあまり例がないと思います。しかし、多いからと言って決してイージーではございません。例えば癌の治療という協和発酵と比較的近い研究をしていても、この助成をもらうのは容易ではございません。私どものラボでは、加藤記念財団に申請したいがあれば難しいよというのが口癖でございます。松田社長のお話にもございましたが、協和発酵の事業とこの研究助成の内容とが独立している、公平に審査がおこなわれている、これがこの助成の名を高めている一つの理由だと思います。

そういうわけで受賞者の方は高いバリアーを超えてこの賞を受けられたということです。ぜひ研究を今後も伸ばして行って頂きたいと思います。

それでは乾杯の音頭を取らせていただきます。今日助成を受けられました先生方の研究の発展を祈念いたしまして、あわせて今日ご列席の皆様方のご健勝を願ひまして乾杯いたしたいと思います。ご唱和下さい。乾杯。どうもありがとうございました。

お祝いの言葉

財団理事 木村 光 先生

本日はたくさんの方、受賞された方の集まりで、本当におめでとうでございます。これは非常にバリアーの高い助成ですので、選ばれるということはレベルの高さを示すことでおめでたいことだと思います。ただ私が気になっているのは、日本では大学制度を考えてもらえば分かりますが、入り口はバリアーが高いのですが、出口が野放しになっていることが多いですね。ですから、これをもたらたらあとは適当に報告書を書いてと思っている方がいたらそういう不埒な考えは絶対やめてもらいたい。これは最初の一步であって、ホップ、ステップ、ジャンプのための試金石だということを肝に銘じてほしいと思います。今までにこの助成は、本当にそうそうたる人がもらっています。10年先か15年先か皆さんがそういう風になられるようにみんな期待しているわけです。それから、これは協和発酵のご厚意で出ているお金を皆さんに援助しているということなので、その辺も重く受け止めて

頂きたいと思います。

今日は若い研究者が多いので、この世代に今後いかに独創的な研究をやってもらえるかということで、最近私が考えていることを2、3お話させて頂きたいと思います。まずは概念枠をしっかりとすることです。どういうことかと言いますと、「それでも地球は動いている」ということで、天動説は誤りで地動説が正しいと、我々はずっと教えられてきましたが、ある意味ではどちらでもよい話なんです。というのは、地動説も天動説も同じチコ・プラーエという人の非常に詳しい天体観測のデータが基礎となっており、その概念枠の違いで天と地の違いがでてくるわけです。皆さんもただデータを集めたらいいというわけではなく、それをどう解釈するかということが非常に大事だと思います。

それからパスツールの話をしますと、ワイン中に酒石酸の結晶ができたわけですが、そのD型L型を顕微鏡でみてピンセットで分けたのがパスツールです。これは非常に偶然が重なった結果ですが、一つは、パリで結晶を出したことで、パリの気候は26度以下だったからああいう結晶が出たわけです。もう一つのファクターとして、彼はナトリウムアンモニウム塩を使いましたが、他の塩ではああいう結晶は出ないらしい。そういう偶然が二つ重なって初めてD体L体異なる結晶ができて分けられたんです。あれは偶然の発見だと言う人もいますが、非常に大きい発見で、そのおかげで光学活性ということが分かってきたわけです。それではそういう偶然をどうして掴むかということですが、ぼさっと実験しては絶対に掴めない。パスツール自身が言っていますが、プリペアドマインド、そういう心持ちで実験していないとチャンスを掴めない。だからぜひともそういう気持ちでチャンスを掴んで頂きたい。

もう一つは、アルコール発酵の代謝経路、エムデン・マイヤーホフ経路と言いますが、このマイヤーホフという人のことです。この人は元々カント派の哲学者で、深く考える人でした。それまでは酵母の発酵と筋肉における解糖はまったく別の研究課題と考えられていましたが、彼はこれらが共通の経路だと見破ったわけです。それで実際証明していった今や解糖系と呼ばれているわけです。それまでは全く別と思われていたものを本当に細かい視点で実験して概念枠で捕え、その一方では非常に大きな立場から自然を見る目を養う必要があるということだと思います。マイヤーホフはナチス政権を逃れ、アメリカに渡って研究を続けましたが、平和な時代であればもっともっと業績が上がったのではないかとされており、幸い日本は平和ですので、この5年、10年の間に皆さんがきら星のごとき、最先端の仕事で大きな成果を出されることを期待しておりますので、頑張ってください。どうもありがとうございました。

(5) スナップ写真

第19回加藤記念研究助成贈呈式

《贈呈式》

第19回 加藤記念研究助成 贈呈式



平田 正 理事長



山根久和 選考副委員長



菱山 豊 文部科学省課長





第19回研究助成受領者と財団関係者

《祝賀パーティー》



鶴尾 隆 評議員



協和発酵工業(株)
松田 讓 社長



木村 光 理事



4. 平成19年度決算報告

(1) 収支計算書

平成19年度収支計算書

平成19年4月1日から平成20年3月31日まで

単位：円

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異	備 考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
① 基本財産運用収入	6,000,000	6,126,425	△ 126,425	
② 受取寄付金	72,000,000	72,000,000	0	
③ 受取利息	50,000	160,140	△ 110,140	
事業活動収入計	78,050,000	78,286,565	△ 236,565	
2. 事業活動支出				
① 事業費支出				
研究助成	50,000,000	50,000,000	0	
国際交流助成	7,500,000	7,400,000	100,000	
普及啓発費	1,500,000	1,200,000	300,000	
事業促進費	9,000,000	10,627,543	△ 1,627,543	
年報出版費	1,200,000	768,283	431,717	
事業費支出計	69,200,000	69,995,826	△ 795,826	
② 管理費支出				
会議費	1,000,000	1,061,325	△ 61,325	
旅費交通費	3,500,000	2,863,312	636,688	
人件費	3,600,000	3,600,000	0	
什器備品費	200,000	0	200,000	
通信費・消耗品費等	1,000,000	1,351,220	△ 351,220	
管理費支出計	9,300,000	8,875,857	424,143	
事業活動支出計	78,500,000	78,871,683	△ 371,683	
事業活動収支差額	△ 450,000	△ 585,118	135,118	
II 投資活動収支の部	0	0	0	
III 財務活動収支の部	0	0	0	
IV 予備費支出	500,000	0	500,000	
当期収支差額	△ 950,000	△ 585,118	△ 364,882	
前期繰越収支差額	13,850,000	13,814,096	35,904	
次期繰越収支差額	12,900,000	13,228,978	△ 328,978	

(2) 財産目録

財 産 目 録

平成 20 年 3 月 31 日現在

(単位：円)

科 目	金 額		
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金			
現金 現金手許有高	146,732		
普通預金 みずほ銀行丸の内支店	3,635,280		
みずほ銀行相模大野支店	13,238,884		
東京三菱 UFJ 銀行 新橋支店	1,378,306		
流動資産合計		18,399,202	
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
定期預金 三菱 UFJ 信託銀行本店	50,000,000		
農林中央金庫本店	81,000,000		
東京三菱 UFJ 銀行 新橋支店	175,000,000		
投資有価証券 みずほコーポレート 銀行債券	100,000,000		
農林中央金庫債券	300,000,000		
基本財産合計	706,000,000		
固定資産合計		706,000,000	
資産合計			724,399,202
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金 会議費、通信費に対する未払額	5,170,224		
流動負債合計		5,170,224	
2. 固定負債	0	0	
負債合計			5,170,224
正味財産			719,228,978

(3) 正味財産増減計算書

正味財産増減計算書

平成19年4月1日から平成20年3月31日まで

(単位：円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
①基本財産運用益			
基本財産受取利息	6,126,425	3,121,335	3,005,090
②受取寄付金			
受取寄付金	72,000,000	72,000,000	0
③雑収益			
受取利息	160,140	75,905	84,235
経常収益計	78,286,565	75,197,240	3,089,325
(2) 経常費用			
①事業費	69,995,826	69,710,814	285,012
研究助成	50,000,000	50,000,000	0
国際交流助成	7,400,000	7,150,000	250,000
普及啓発費	1,200,000	1,517,010	△ 317,010
事業促進費	10,627,543	9,885,442	742,101
年報出版費	768,283	1,158,362	△ 390,079
②管理費	8,875,857	8,485,789	390,068
会議費	1,061,325	800,439	260,886
旅費交通費	2,863,312	2,591,461	271,851
人件費	3,600,000	3,600,000	0
通信費・消耗品費等	1,351,220	1,493,889	△ 142,669
経常費用計	78,871,683	78,196,603	675,080
当期経常増減額	△ 585,118	△ 2,999,363	2,414,245
2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益			
①過年度助成金返戻額	0	1,000,000	△ 1,000,000
経常外収益計	0	1,000,000	△ 1,000,000
(2) 経常外費用	0	0	0
当期経常外増減額	0	1,000,000	△ 1,000,000
当期一般正味財産増減額	△ 585,118	△ 1,999,363	1,414,245
一般正味財産期首残高	13,814,096	15,813,459	△ 1,999,363
一般正味財産期末残高	13,228,978	13,814,096	△ 585,118
II 指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	706,000,000	706,000,000	0
指定正味財産期末残高	706,000,000	706,000,000	0
III 正味財産期末残高	719,228,978	719,814,096	△ 585,118

(4) 貸借対照表

貸借対照表

平成20年3月31日現在

(単位：円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	18,399,202	14,935,440	3,463,762
流動資産合計	18,399,202	14,935,440	3,463,762
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
定期預金	306,000,000	306,000,000	0
投資有価証券	400,000,000	400,000,000	0
基本財産合計	706,000,000	706,000,000	0
固定資産合計	706,000,000	706,000,000	0
資産合計	724,399,202	720,935,440	3,463,762
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	5,170,224	1,121,344	4,048,880
流動負債合計	5,170,224	1,121,344	4,048,880
負債合計	5,170,224	1,121,344	4,048,880
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
寄付金	706,000,000	706,000,000	0
指定正味財産合計	706,000,000	706,000,000	0
(うち基本財産への充当額)	-706,000,000	-706,000,000	0
(うち特定資産への充当額)	0	0	0
2. 一般正味財産	13,228,978	13,814,096	△ 585,118
(うち基本財産への充当額)	0	0	0
(うち特定資産への充当額)	0	0	0
正味財産合計	719,228,978	719,814,096	△ 585,118
負債及び正味財産合計	724,399,202	720,935,440	3,463,762

II. 平成20年度事業計画

平成20年度の事業計画は、平成20年2月1日(金)開催の第39回理事会・評議員会にて審議の上、承認された。主要事業は次の通りである。

1. 助成事業

(1) 第20回(2008年度)加藤記念研究助成

1) 「研究助成」

助成対象者：メディカルサイエンス分野は、Aグループの研究機関に属する研究者。バイオテクノロジー分野は、A及びBグループの研究機関に属する研究者。

助成金額：4,400万円(1件200万円、22件)

推薦者：理事・評議員又は申請者の所属する機関の長

応募期間：平成20年6月初旬～8月31日

選考委員会：平成20年12月4日

助成金の贈呈式：平成21年3月6日

2) 「奨励研究助成」

助成対象者：A及びBグループの研究機関に属する研究者

助成金額：600万円(1件100万円、6件)

推薦者：理事・評議員又は申請者の所属する機関の長

応募期間：平成20年6月初旬～8月31日

選考委員会：平成20年12月4日

助成金の贈呈式：平成21年3月6日

(2) 第20回(2008年度)加藤記念国際交流助成

助成対象者：公募

助成金額：前期450万円

後期300万円

推薦者：申請者の所属する機関の長

応募期間：前期 平成20年4月1日～5月31日

(4月～9月末までの学会対象)

後期 平成20年6月1日～8月31日

(10月～翌年3月末までの学会対象)

選考委員会：前期 平成20年6月26日

後期 平成20年9月18日

(3) 第19回学会等の開催助成

募集方法：非公募で理事・評議員の推薦による。

助成金額：100万円(1件20万円程度、5件程度)

助成対象：国内で開かれるバイオサイエンス分野の学会等
(参加者数は原則1,000名以下)

2. 創立20周年記念事業

(1) 創立20周年記念講演会の開催

開 催 日：平成21年3月6日(金)贈呈式と同日
会 場：日本工業倶楽部会館
演 者：審良静男教授(大阪大学 免疫学フロンティア研究センター 拠点長)
大隈典子教授(東北大学 大学院医学系研究科)
堀之内末治教授(東京大学 大学院農学生命科学研究科)
浅野泰久教授(富山県立大学 生物工学研究センター 所長)

(2) 創立20周年記念特別枠研究助成

助 成 対 象 者：指定研究課題に該当する研究者(年齢制限無し)
研 究 課 題：「癌分野における基礎から臨床への橋渡し研究(Translational Research)」
助 成 金 額：900万円(1件300万円、3件)
推 薦 者：癌関連学会(日本癌治療学会、日本臨床腫瘍学会、日本癌学会)からの推薦の場合
は学会代表者。公募の場合は申請者が所属する機関の長。
応 募 期 間：平成20年6月初旬～8月31日
選 考 委 員 会：平成20年12月4日
助成金の贈呈式：平成21年3月6日

(3) 記念誌の発行

3. 平成20年度事業予算

平成20年度収支予算書

平成20年4月1日から平成21年3月31日まで

単位：円

科 目	当 年 度	前 年 度	差 異	備 考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
① 基本財産運用収入	6,500,000	6,000,000	500,000	
② 受取寄付金	90,000,000	72,000,000	18,000,000	
③ 受取利息	50,000	50,000	0	
事業活動収入計	96,550,000	78,050,000	18,500,000	
2. 事業活動支出				
① 事業費支出				
研究助成	59,000,000	50,000,000	9,000,000	
国際交流助成	7,500,000	7,500,000	0	
普及啓発費	6,000,000	1,500,000	4,500,000	
事業促進費	10,500,000	9,000,000	1,500,000	
年報出版費	1,000,000	1,200,000	△ 200,000	
事業費支出計	84,000,000	69,200,000	14,800,000	
② 管理費支出				
会議費	1,500,000	1,000,000	500,000	
旅費交通費	4,000,000	3,500,000	500,000	
人件費	3,600,000	3,600,000	0	
什器備品費	200,000	200,000	0	
通信費・消耗品費等	1,500,000	1,000,000	500,000	
管理費支出計	10,800,000	9,300,000	1,500,000	
事業活動支出計	94,800,000	78,500,000	16,300,000	
事業活動収支差額	1,750,000	△ 450,000	2,200,000	
II 投資活動収支の部	0	0	0	
III 財務活動収支の部	0	0	0	
IV 予備費支出	500,000	500,000	0	
当期収支差額	1,250,000	△ 950,000	2,200,000	
前期繰越収支差額	12,900,000	13,850,000	△ 950,000	
次期繰越収支差額	14,150,000	12,900,000	1,250,000	

4. 平成20年度新たに就任した財団役員等 (平成20年4月1日付)

常務理事 高橋 充 (協和発酵工業(株) 嘱託)
選考委員 後藤由季子 (東京大学 分子細胞生物学研究所 教授)
坂口 志文 (京都大学 再生医科学研究所 教授)
戸井 雅和 (京都大学 大学院医学研究科 教授)
畠 清彦 (癌研究会・有明病院化学療法科兼血液腫瘍科 部長)
間野 博行 (自治医科大学 ゲノム機能研究部 教授)

Ⅲ. 助成金受領者からの報告

1. 第17回研究助成報告

当財団では、研究助成受領から3年後に助成対象となった研究の成果報告を受けることになっている。以下に第17回(平成17年度)の研究助成受領者からの報告を掲載した。

なお、この研究報告内容は民間助成研究成果データベースに収録のため国立情報研究所に提供されている。

1) 単一細胞イメージングシステムによる慢性痛メカニズムの解明 池田 弘(福井大学工学部 知能システム工学科)	29
2) 肝臓特異的HNF4 α ノックアウトマウスにおける鉄代謝異常の分子機構の解明 井上 裕介(群馬大学工学部 生物化学工学科)	30
3) 細胞の多様性を生み出す非対称分裂の制御機構 入江 賢児(筑波大学 大学院人間総合科学研究科)	31
4) 電子線トモグラフィーを使用した細胞内分子の三次元可視化 岩崎 憲治(大阪大学 蛋白質研究所附属 プロテオミクス総合研究センター)	32
5) センサータンパク質をベースとした脳内シグナル分子観測システムの構築 内田 毅(北海道大学 大学院理学研究院)	33
6) 転移因子LINEの転移制御機構に関する研究 梶川 正樹(東京工業大学 大学院生命理工学研究科)	34
7) 生きたままの機能解析を可能とする設計センサー分子 菊地 和也(大阪大学 大学院工学研究科)	35
8) リポ多糖認識に伴う生体膜融合及び感染防御機構の分子基盤解析 小柴 琢己(九州大学 大学院理学研究院 生物科学部門)	36
9) 昆虫細胞・個体内での効率的タンパク質発現に向けたRNA結合タンパク質の人為操作 小谷 英治(京都工芸繊維大学 繊維学部応用生物学科)	37
10) 制御性樹状細胞による免疫制御の分子機構の解明 小林 隆志(九州大学 生体防御医学研究所 免疫制御学分野)	38
11) 脱ユビキチン化による増殖因子受容体ダウンレギュレーションの調節機構 駒田 雅之(東京工業大学 大学院生命理工学研究科)	39
12) Blimp1(Prdm1)とPrdmXによる生殖細胞形機序の解明とその再構成 斎藤 通紀(理化学研究所 発生・再生科学総合センター)	40

13) 視床下部におけるグレリンの分泌調節機構の解明	
佐藤 貴弘(久留米大学 分子生命科学研究所 遺伝情報研究部門)	41
14) 時間治療への応用を目的として循環器疾患における体内時計の役割を解明する	
武田 憲彦(東京大学 大学院医学系研究科 循環器内科)	42
15) 触媒的不斉[4+2]付加環化反応による光学活性ラクトンの合成	
田中 健(東京農工大学 大学院共生科学技術研究員)	43
16) グラム陽性菌のクォーラムセンシングを標的とした新奇抗感染症剤の創製	
中山 二郎(九州大学 大学院農学研究院 生物機能科学部門)	44
17) 人工ハイブリッド型ユビキチン化酵素による癌治療法の開発	
畠山 鎮次(北海道大学 大学院医学研究科)	45
18) 大脳の神経細胞層形成を司る分子機構	
服部 光治(名古屋市立大学 大学院薬学研究科)	46
19) HB-EGFカルボキシ末端ペプチド断片による新規シグナル伝達経路の解析	
檜枝 美紀(愛媛大学医学部 生化学分子遺伝学)	47
20) YAC遺伝子導入マウスを用いたゲノミック・インプリンティング確立機構の解析	
松崎 仁美(筑波大学 大学院生命環境科学研究科)	48
21) 哺乳類オートファージの制御因子の解析	
水島 昇(東京医科歯科大学 医歯学総合研究科 細胞生理学分野)	49
22) 食品多糖類の新規生理機能を探索するための基礎研究	
矢部 富雄(岐阜大学 応用生物科学部 応用生命科学講座)	50
23) 血管内皮細胞から血管平滑筋・リンパ管内皮細胞への分化を調節する分子機構の解明	
渡部 徹郎(東京大学 大学院医学系研究科)	51

2. 第19回国際交流助成報告

国内で実施された研究の成果を、平成19年4月から20年3月の間に海外で開催された学会等で発表するに際し、当財団の助成(第19回国際交流助成)を受けた研究者からの学会等参加報告を以下に記載した。

前期

- 1) EMBOカンファレンス、Nuclear Structure and Dynamics
磯兼真由美(愛媛大学 大学院医学系研究科) 54
- 2) 第3回世界薬学会議
板垣 史郎(北海道大学 大学院薬学研究院) 55
- 3) 第5回国際幹細胞生物学会年会
伊藤 貴浩(東京大学 大学院薬学系研究科) 56
- 4) 第1回国際自然免疫学会
上原亜希子(東北大学 大学院歯学研究科) 57
- 5) 第6回無機炭素利用国際会議
大西 紀和(京都大学 大学院生命科学研究所) 58
- 6) 第3回錯視コンテスト(視覚学会)
加藤 正晴(東京女子医科大学医学部 乳児行動発達学講座) 59
- 7) 第98回米国癌学会総会
加藤 幸成(産業技術総合研究所 糖鎖医工学研究センター) 60
- 8) 第14回ヨーロッパ癌学会
河田 英里(京都大学医学部附属病院 輸血細胞治療部) 61
- 9) 国際幹細胞研究学会
合山 進(東京大学医学部附属病院 血液・腫瘍内科) 62
- 10) 第15回欧州内視鏡外科学会国際会議
杉本 真樹(帝京大学 ちば総合医療センター 外科) 63
- 11) 第48回国際脂質生化学会議
田中 将史(神戸薬科大学 薬品物理化学研究室) 64
- 12) 昆虫バイオテクノロジーおよび産業に関する国際学会
千枝 結香(九州大学 大学院農学研究院) 65
- 13) セカンドメッセンジャー及びリン酸化蛋白に関する国際カンファレンス
西原 広史(北海道大学 大学院医学研究科) 66
- 14) 第5回ヨーロッパ原虫学会および、第11回ヨーロッパ繊毛虫学会合同大会
福田 康弘(金沢大学 大学院自然科学研究科) 67
- 15) 第28回国際臨床生物統計学会年次大会
船渡川伊久子(帝京大学医学部 衛生学) 68
- 16) 第9回バイオテクノロジー・金属錯体・触媒に関する国際会議
古谷 祐詞(名古屋工業大学 大学院工学研究科) 69

17) 第21回国際血栓止血会議 松本 幸子(鳥取大学医学部 病態生化学)	70
18) 2007年国際原生生物学会/米国藻類学会合同学会 丸山真一朗(東京大学 大学院理学系研究科)	71
19) 第72回 コールド・スプリング・ハーバー・シンポジウム 吉種 光(東京大学 大学院理学系研究科)	72

後期

1) 第15回国際サイトカイン学会年次集会 加野 真一(東京大学 大学院医学系研究科)	73
2) 第49回米国血液学会 上辻 由里(京都府立医科大学 大学院医学研究科)	74
3) キーストンシンポジウム「植物ホルモンとシグナル伝達」 上中 弘典(鳥取大学農学部)	75
4) アメリカ微生物学会 第3回細菌細胞間コミュニケーション国際会議 河原井武人(国立感染症研究所)	76
5) 第47回アメリカ細胞生物学会 斎藤 将樹(東北大学 国際高等研究教育機構・国際高等融合領域研究所)	77
6) 第11回化学・生命科学用超小型機器に関する国際会議 立原 淳貴(東京大学 大学院工学系研究科)	78
7) 第2回生体材料・組織のメカニクスに関する国際会議 谷本 安浩(日本大学 松戸歯学部)	79
8) コールドスプリングハーバー研究所ショウジョウバエ神経生物学ミーティング 田村 拓也(東京医科歯科大学 難治疾患研究所 神経病理学)	80
9) 第3回国際アスペルギルス症学会 豊留 孝仁(千葉大学 真菌医学研究センター)	81
10) 北米神経科学学会 寅嶋 崇(金沢大学 大学院医学系研究科)	82
11) 第37回北米神経科学学会 丹羽 美苗(名城大学 大学院薬学研究科)	83
12) 第56回米国熱帯医学学会総会 貫井 陽子(国立感染症研究所)	84
13) アメリカ微生物学会 第3回細菌細胞間コミュニケーション国際会議 平川 秀忠(大阪大学 産業科学研究所)	85
14) 国際ワークショップ「極度のエネルギー制限条件下における微生物の生命維持」 堀 知行(東京大学 大学院農学生命科学研究科)	86
15) アメリカ人類遺伝学会 第57回総会 牧野 悟士(徳島大学 大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)	87

IV. 財団の運営と組織

1. 設立趣意

21世紀に向けて、現代社会が有限な天然資源をもとに繁栄を持続するためには、バイオサイエンス・技術の継続的進歩と、それを活用する関連産業の発展が重要であることは言うまでもありません。

近年における生命科学はゲノムやプロテオーム科学などの先端技術や、それを駆使した細胞レベルの研究分野で日々激しい競争が展開されており、その進歩は目覚ましいものがあります。近い将来、わが国の研究がこれらの新しい分野で飛躍的な進歩を達成しうるならば、それは国内の社会経済の発展にも大きく貢献できるものと信じます。そのために、科学技術基本計画に基づき、総合的見地から国を挙げての各種生命科学の研究振興と人材育成が課題であり、その過程で生まれた創造的発明の早急な実用化が望まれます。また一方で、真に価値ある先駆的研究は、個性的で創造性豊かな研究者により、また既存の制約を超えた研究環境下で、粘り強い努力から生み出されるものと期待されます。

このような認識から、本財団はバイオサイエンスの分野で有能な研究者を全国に発掘し、その創造的研究に対して資金的支援を継続することは極めて有意義であるとし、財団設立以来微力ながらも研究の資金助成および国際交流、研究集会などの助成を鋭意続けてまいりました。さらには公開シンポジウムによるバイオサイエンスの啓蒙も重要な活動となっております。これらはわが国のバイオサイエンス研究が一日も早く世界的最高水準に達することを念願してのことです。

協和発酵工業株式会社は、バイオテクノロジーと有機合成化学などの技術を基盤に広く産業活動を展開しております。同社の創設者である加藤辨三郎は企業活動の発展をめざすと共に科学技術の振興によって社会の発展と人類の福祉への貢献を同社の経営理念としておりました。加藤翁は昭和58(1983)年8月に永眠いたしました。40年余におよぶ会社経営の他に、わが国の多くの科学技術委員会などに関与した体験を通してバイオサイエンス振興の一層の必要性を強調いたしておりました。

こうした加藤翁の遺志を生かし、また総合的で領域横断的観点からバイオサイエンス研究振興の重要性を認識した協和発酵工業株式会社は、同社の創立40周年の記念事業として、昭和63(1988)年12月、財団法人加藤記念バイオサイエンス研究振興財団を設立いたしました。

2. 目 的 (寄附行為第 3 条)

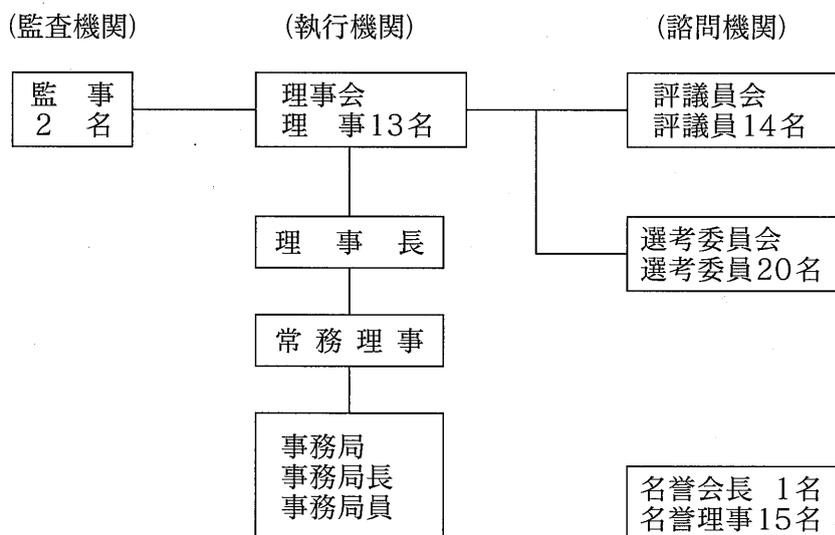
この法人は、バイオサイエンスの分野における研究者に対する助成ならびにシンポジウム・研究会の開催・助成を行なうことにより、科学技術の振興をはかり、もって社会経済の発展に寄与することを目的とする。

3. 事 業 (寄附行為第 4 条)

この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行なう。

- (1) バイオサイエンスおよびこれに関連する分野における研究者に対する助成
- (2) バイオサイエンスおよびこれに関する分野における研究者の国際交流の助成
- (3) バイオサイエンスおよびこれに関する分野におけるシンポジウム・研究会の開催および助成
- (4) その他目的を達成するために必要な事業

4. 組 織 (平成20年 4 月 1 日現在)



5. 財団の概要

名 称	財団法人 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 Kato Memorial Bioscience Foundation
設立許可日	1988年12月23日
主務官庁	文部科学省
特定公益増進法人許可	2007年11月28日更新
基本財産	7億6百万円
出 捐 者	協和発酵工業株式会社 (東京都千代田区大手町1-6-1 大手町ビル) URL : http://www.kyowa.co.jp

事業内容

(1) 研究助成

助成対象	バイオサイエンスの基礎分野において、独創的且つ先駆的研究をめざす国内の若手研究者。但し、学生、大学院生、本助成金を受領後3年を経ない研究者および当財団の選考委員と同一研究室に所属する研究者は対象外とします。
助成対象 研究と 応募年齢	「研究助成」 バイオサイエンス研究分野を、①“メディカルサイエンス分野”と、②“バイオテクノロジー分野”に区分して募集します。応募年齢は男性は40歳以下、女性は45歳以下を対象とします(応募期限 8月31日現在満年齢)。 「奨励研究助成」 バイオテクノロジー分野において領域を指定して募集します。応募年齢は男性は35歳以下、女性は40歳以下とします(同上)。
募集方法	財団指定の研究機関へ推薦依頼。当財団所定の申込書に必要事項をご記入の上、所定の推薦書を添えて当財団へ申し込んで下さい。
募集期間	6月上旬より募集を開始し、8月31日を応募締切とします。
助成金 交付時期	3月31日までに交付します。

(2) 国際交流助成

助成対象	海外で開催されるバイオサイエンス分野の学会、シンポジウムに発表予定の35歳(医歯学系卒業者は37歳)までの国内の若手研究者。
募集方法	公募によります。当財団所定の申込書に必要事項をご記入の上、当財団へ直接申し込んで下さい。

募集期間

前期：4月1日～9月30日の期間に発表される方は、4月1日～5月31日とします。

後期：10月1日～翌年3月31日の期間に発表される方は、4月1日から8月31日とします。

**助成金
交付時期**

前期：7月中(選考会6月)

後期：10月中(選考会9月)

(注) 上記1および2の詳細は財団ホームページをご参照下さい。

URL：<http://www.katokinen.or.jp>

(3) 学会等開催助成

助成対象

バイオサイエンス分野の学会、シンポジウム等の開催費用の助成。但し、原則として1,000人以下の規模を対象とします。

募集方法

非公募で、当財団理事または評議員の推薦によります。

(4) その他、財団の目的を達成するために必要な事業

6. 平成19年度財団役員等

理 事 長	平 田 正	協和発酵工業(株)相談役
常 務 理 事	土井内 徹**	協和発酵工業(株)顧問
理 事	大 塚 栄 子	北海道大学名誉教授 北海道大学監事
	大 村 智	(社)北里研究所理事・所長
	岡 田 吉 美	東京大学名誉教授
	小 田 鈎一郎	東京理科大学基礎工学部嘱託教授
	折 茂 肇	健康科学大学学長
	香 川 靖 雄	自治医科大学名誉教授 女子栄養大学副学長
	岸 本 忠 三	前総合科学技術会議議員 大阪大学生命機能研究科教授 (財)千里ライフサイエンス振興財団理事長
	木 村 光*	京都大学名誉教授 (株)グリーンバイオ代表取締役
	高 久 史 麿	東京大学名誉教授 自治医科大学学長
	別 府 輝 彦	東京大学名誉教授 日本大学大学院総合科学研究科教授
	森 謙 治	東京大学名誉教授
監 事	伊 藤 醇	公認会計士
	樋 口 節 夫	公認会計士 みすず監査法人代表社員
評 議 員	小 川 秀 興	順天堂大学学長
	垣 添 忠 生	国立がんセンター名誉総長
	勝 木 元 也	自然科学研究機構理事 基礎生物学研究所名誉教授
	北 原 武	東京大学名誉教授 (社)北里研究所基礎研究所部長・客員教授 帝京平成大学薬学部教授
	郷 通 子	お茶の水女子大学学長 総合科学技術会議議員
	榊 佳 之	(独)理科学研究所ゲノム科学総合研究センター センター長
	谷 口 維 紹	東京大学大学院医学系研究科教授
	鶴 尾 隆	(財)癌研究会・癌化学療法センター所長
	永 井 良 三	東京大学大学院医学系研究科教授
	長 澤 寛 道*	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
	長 田 重 一	京都大学大学院医学研究科教授
	中 野 洋 文**	玉川大学学術研究所客員教授 (社)北里研究所基礎研究所部長
	西 川 伸 一	(独)理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター 副センター長
	三 品 昌 美	東京大学大学院医学系研究科教授
	柳 田 敏 雄	大阪大学大学院生命機能研究科教授

選考委員長	山本一彦	東京大学大学院医学系研究科教授
副選考委員長	山根久和	東京大学生物生産工学研究センター教授
選考委員	審良静男**	大阪大学微生物病研究所教授
	一條秀憲*	東京大学大学院薬学系研究科教授
	内海成	京都大学大学院農学研究科教授
	加藤茂明*	東京大学分子細胞生物学研究所教授
	門脇孝**	東京大学大学院医学系研究科教授
	久保田紀久枝	お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授
	五味勝也	東北大学大学院農学研究科教授
	阪井康能*	京都大学大学院農学研究科教授
	住本英樹**	九州大学生体防御医学研究所教授
	清木元治*	東京大学医科学研究所教授
	瀬原淳子	京都大学再生医科学研究所教授
	難波啓一	大阪大学大学院生命機能研究科教授
	西田栄介**	京都大学大学院生命科学研究科教授
	畠山昌則*	北海道大学遺伝子病制御研究所教授
	福山透	東京大学大学院薬学系研究科教授
	水澤英洋	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授
	依田幸司	東京大学大学院農学生命科学研究科教授

名 誉 職

名誉会長	木下祝郎	協和発酵工業(株)元会長
名誉理事	池原森男	大阪大学名誉教授 (株)生物分子工学研究所嘱託
	伊藤正男*	東京大学名誉教授 (独)理化学研究所脳科学総合研究センター特別顧問
	井上一郎	東京工業大学名誉教授
	大澤利昭	東京大学名誉教授 東京薬科大学名誉教授
	小関治男	京都大学名誉教授
	清水喜八郎	(社)北里研究所顧問
	白砂信善	公認会計士
	菅野晴夫	(財)癌研究会顧問
	中嶋暉躬	東京大学名誉教授 星薬科大学学長
	中村寛之助	協和発酵工業(株)元会長
	早石修	京都大学名誉教授 (財)大阪バイオサイエンス研究所理事長
	藤巻正生	東京大学名誉教授 お茶の水女子大学名誉教授 (財)食生活研究会理事長

松 井 正 直 東京大学名誉教授
水 野 傳 一 東京大学名誉教授
山 田 秀 明 京都大学名誉教授 富山県立大学名誉教授

所属及び役職は平成19年4月1日時点

*平成19年4月1日 就任

**平成20年3月31日 退任

事 務 局 (平成20年4月1日現在)

事 務 局 長 落 合 恵 子

事 務 局 員 奥 村 美 香

おわりに

常務理事のバトンを受けて

常務理事 高橋 充

平成20年4月に常務理事のバトンを引き継ぎ約4ヶ月が経過しました。これまで当財団の設立趣旨・基本理念は理解していたつもりですが、運営には全く係わっていませんでした。新任常務理事としては一から勉強と割り切って、「これ何?」、「どうして?」を連発し、事務局長を困らせている状況です。

折しも平成20年度は、通常の助成事業に加え、当財団創立20周年の記念行事という大きな活動が予定されています。また新公益法人制度移行がいよいよ本年12月からスタートしますので(5年以内の移行完了が必要)、移行のためのコンセプト確認・スケジュール化もこの1年の重要課題となります。創立以来の20年間をまとめて振り返り、新制度移行との関係を含めて、今後の財団活動をしっかり見詰め直すには又と無い機会だと受け止めています。

20周年記念事業については前年度より企画委員の先生方のご協力もいただきすでに概要は決まっています。一つ目は、これまでの当財団研究助成受領者の中から選ばれた4名の先生方による記念講演会を開催します。ご専門の研究内容に加え、研究の転機・ブレークスルーに至った経緯など、若手研究者の参考になる話をお伺いできればと考えています。二つ目は、特別枠研究助成「癌分野における基礎から臨床への橋渡し研究」を実施します。バイオサイエンス基盤研究を幅広く助成することを旨としている当財団としては多少チャレンジングなテーマかもしれません。基盤研究といえども社会ニーズ、産業との係わりを十分意識することも重要であるとの認識から今回20周年特別枠として実施するものです。三つ目は、記念誌の発行です。当財団の年報は10周年時に第1号を発行しましたので、それまでの記録は十分整理されていない面があります。この機会に全体を整理するとともに、創立から現在に至るまでの関係者から財団に対するご意見をいただき、今後の財団運営に生かしたいと考えています。

ところで一般論ですが、現在の公益財団はいくつかの課題を抱えているといわれているようです。低金利状態が続き基本財産の運用益がほとんど期待できない現状では、資金面からみた財団基盤は安定しているとはいえません。財団としては、出捐者から継続的な寄付をいただくためにはしっかりした活動をする一方、運営が少しでも楽になるための努力が求められます。また、企業を含む多くの団体が以前に比べて自らの社会貢献活動に積極的に取り組んでいますので、コンセプトが曖昧な財団はその存在意義を問われかねません。

一方、財団を取り巻く社会環境の変化も考慮する必要があります。例えば、大学等の基盤研究に対し政府より提供される科研費などの研究補助金は近年大幅に増額されてきたという経緯があります。財団の助成金はわずかとはいえ、研究資金が十分でない優れた研究者を発掘しタイムリーに支援することに意味があるとすれば、このような環境変化への対応も心掛けたいものです。また、本年12月から移行作業が開始される新公益法人制度は、ガバナンス強化が最大のポイントだといわれています。

当財団の現状は問題無いとはいえ新制度移行に向け、理事会・評議員会の運営方法、各種規程類の整備を含めて、管理・運営面で更に詰める必要があります。

常務理事就任後慣れない中、理事・評議員・選考委員の先生方、諸先輩、関係者の皆様のご協力で、まずはバトンを落とさず走り始めることができたという段階です。我が国バイオサイエンスの振興という当財団の基本理念は、間もなく創立20年を迎えようとしている現在、益々その重要性を増しているように感じられます。目標に向けて精一杯努力する所存ですので、皆様の変わらぬご支援・ご指導をお願い申し上げます。

編集後記(財団年報2007)

事務局長 落合 恵子

財団年報がB5版からA4版に変わりましたが、お気づき頂けたでしょうか。区切りの良い平成20年度の年報から体裁と内容を変更しようと考えておりましたが、新任常務理事の「ひとりごと」と称する熱い議論にまきこまれて、今回の年報は体裁も内容も二転三転し印刷所泣かせとなりましたが、最終的にA4版の読みやすい形に変更しました。財団年報は事業総括の目的で創刊されましたが、近年、公益法人に対する主務官庁からの指導が厳しくなり、公益法人実地検査事項のひとつである「助成事業の実績(成果)及び奨学制度の効果について検証・評価しているか」の項目の証拠書類として、実績(成果)報告書の掲載も重視されるようになりました。この成果報告書の形式や年報発行の時期に関しては、まだまだ検討の余地があるようです。

さて、平成19年度は通常の事業活動に加えて財団ホームページを改訂・充実させ情報公開・広報活動に力を注ぎました。また、創立20周年記念事業企画委員会を設置し、企画委員の先生方(香川靖雄理事、別府輝彦理事、鶴尾 隆評議員、三品昌美評議員)のご支援を頂きながら記念事業の準備に着手致しました。本財団は、今年の12月に満20歳を迎えますが、加藤辨三郎翁の遺志を生かして1988年12月に設立されましたので(辨三郎翁は1983年8月15日に永眠)、辨三郎翁ご自身はこの財団の社会貢献活動についてはご存知ありません。事務局に飾られている辨三郎翁の慈愛に満ちた笑顔のお写真は、“何をか語らん”。自問自答するのみです。

私事で恐縮ですが、新入社員の頃の研究発表会で辨三郎翁からご質問を頂いた事や、研究室に来られてのお話を思い出します。その「分を尽くして用に立つ」という言葉を胸に、私も無事60歳という節目の年を迎えることができました。そして漸く、研究助成受領者へ贈呈される記念の盾の「生かされている」という言葉の重みが分かってきた次第です。

平成20年度の活動も順調にスタートしました。特筆すべきことは、平成20年4月より事務局員が1名専属として加わり、これまで一人でがむしゃらにキリモリしてきた事務を分担して頂けるようになりました。常務理事・事務局長・事務局員という新体制で、創立20周年記念事業の成功に向けて尽力する所存です。今後とも、財団の理念にふさわしい社会貢献活動が継続されますよう、皆様のご支援を心よりお願い申し上げます。

(財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団
財団年報第9号(平成19年度)
Annual Report of Kato Memorial Bioscience Foundation
Vol.9(2007)

発行日 2008年8月15日

発行者 理事長 平田 正

編集者 常務理事 高橋 充

事務局長 落合 恵子

発行所 財団法人 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

〒194-8533 東京都町田市旭町3-6-6

電話：042-725-2576

ファックス：042-729-4009

メール：ben.kato.zaidan@kyowa.co.jp

ホームページ：http://www.katoken.or.jp

印刷 興和印刷株式会社

〒279-0003 千葉県浦安市海楽1-5-11

